

# 「口腔機能と心の発達支援」

～口腔を育てる医療(口腔育成)から、口から育つ心と身体の支援(口腔育成)へ～

UTAKA DENTAL OFFICE 佐々木歯科 院長

佐々木 洋 (ささき ひろし)

●略歴

1951年生まれ、東京医科歯科大学歯学部卒業(1977)後、発達系歯科医学3講座(小児歯科学・歯科矯正学・口腔衛生学)に継続して在籍。現在、昭和大学歯学部口腔衛生学教室兼任講師。乳幼児から高齢者まで、ライフステージに沿った口腔機能の成育・改善が専門。日本矯正歯科学会認定医・日本小児歯科学会認定医。本編と関連する文献・書籍に、「ライフサイクルからみた顎口腔機能へのアプローチ」(西日矯歯誌 1999)、「口腔の成育をはかる」(医歯薬出版社 2003)など。



従来、発達系の歯科つまり小児歯科・歯科矯正・口腔衛生が実践教育してきたのは、口腔すなわち歯や歯列・咬合といった器官としての口を育てる医療であったといえます。しかし、ひとは器官と機能の集まりではありません。「口」は食物の入口でもありますが、言葉を発し微笑むといった意思や感情表出の窓でもあります。「言葉話す」「調理して味わう」行為は人間特有の行動であり、「口」はヒトが人として生活する上で欠かせないエネルギーや情報が入り出る外界との重要な接点に他なりません。また、乳児期の授乳と抱擁により満腹感と幸福感を繰り返し体験することから「気持ち良いところ」が形成されるばかりか、幼児期に家族や集団で食べ物を分かち合うことから他者との関係の理解や「よろこび」の共有などの社会性が生まれます。つまり「口」は心を育む栄養の取り込み口でもあるわけです。

明治以降の近代歯科医学では、口腔にある硬組織(歯)の疾患を治す、あるいは喪失後の補綴を専らとしてきたことから、「虫歯がなければよく噛めるはず」「良い入れ歯が装着されれば自然に食べることは出来るはず」「歯列矯正すれば上手に話せるようになるはず」といった考え方が定着し、こうした「口」がもつ本来の働きを改善する・育てるといった概念は一般化しませんでした。また、従来は家族や地域社会がこれを伝承する機能を果たしていたために、問題が表面化することはありませんでした。それぞれの地域社会で独自の言語文化・食文化・暮らし振りが守られ、こころ豊かなくらしが伝承されていたからです。

しかしこの状況は、第二次世界大戦後の半世紀で大きく変わってきました。歯科医学界で治療から疾病予防へのシフトが図られたのは確かによこばしいことでしたが、「健康の定義は病気でないこと」がはるか過去のこととなった現在でも、臨床・教育・研究の対象となる優先順位は圧倒的に歯科疾患にあります。一方この間、産業構造から日常生活に至るまで社会構造は激変し、少子化・核家族化のみならず子供を育てる環境も一変しました。「個」を大切にする理念は否定すべきものではありませんが、価値観の多様化が意図に反して世代間また個人間の意思疎通を疎外したために、こどもや育児担当者の孤立は電子情報の激増に相反して深まるばかりです。更に政治・経済・情報の急激なグローバル化が、従来型の価値観やくらしの崩壊速度を世界的規模で加速しています。現実の流れの是非は歴史の証明を待つとしても、「日本人がなぜハンバーガーを食べなければならないのだ」とする主張が虚しいように、過去への回帰を模索することでは問題解決は図れません。

医療や福祉の領域での対応を考えると、疾病・障害への対応ではなく、疾病・障害を有する個人の現在から将来に至るまでの生活上の問題への対応が求められています。健康生活を創るのは個々の生活者で、医療従事者が担うのは、個々の生活環境やライフサイクルに沿った専門的支援です。さらに究極的には、ヘルスプロモーションの手法を用いた健康づくりの推進により、健康感を共有できる地域モデルの創設を、生活者とともに積極的に推進する役割が重要となるでしょう。

これを発達系歯科医療職に求められる役目として端的にまとめれば、「障害や疾患の有無にかかわらず、こどもが持つ『口』の働きが十分に活かされ、健やかな心と身体が育つよう育児担当者と考え、育児・子育て・自立支援を行うこと」となります。これが「口腔成育」です。よく耳にする「少子高齢化による疾病構造の変化への対応策」といった標題は、如何にも時勢に合った取組みのように聞こえますが、そもそも疾病や障害の構造とは何なののでしょうか。講演では、専門職ではなく社会が考える障害のモデルから、発達期のこどもの抱える生活機能や障害を捉え、少子化社会における歯科医療職の役割を考察してみたいと思います。

パネル：「ライフステージに応じたセルフケア支援－母乳保育への支援と子どものインフォームドコンセント」

成育医療の概念でも、「ライフサイクルに沿った支援」は重要な柱です。胎児期・乳幼児期・学童期・思春期・成人期と、心・機能・身体それぞれに発育段階の異なるステージでは、支援の目的や目標は異なって当然です。しかもケアや支援の継続が、それぞれの個別背景に合ったケアの自立を促します。基調講演でご提案する「こどもが持つ『口』の働きが十分に活かされ、健やかな心と身体が育つよう支援する」が口腔成育の基本概念なら、各ステージでどのような支援が求められるかを考えたいと思います。

- 1) 口腔のケアは器質的ケアと機能的ケアだけ？
- 2) 安心して母乳保育を続けるために
- 3) ライフステージに応じたセルフケア支援とこどものインフォームドコンセント

## MEMO